

# パラオにおける親族集団の機能と役割

## —利他的行動と幸福感—

廣瀬 淳一

(高知大学教育研究部総合科学系地域協働教育部門)

Function and Role of Relatives Group in Palau;

Altruistic Behavior and Happiness

Junichi Hirose

*Kochi University Research and Education Faculty,*

*Multidisciplinary Science Cluster, Collaborative Community Studies Unit*

**Abstract:** This article explores social design suitable for “endogenous development” from the analysis of Matriarchal system and women in Palau. According to Tsurumi’s way of thinking, Endogenous development respects the principle of field logic including natural ecosystem. Community fulfill of their unique potential to deliver unique value for through a contact with the outside world.

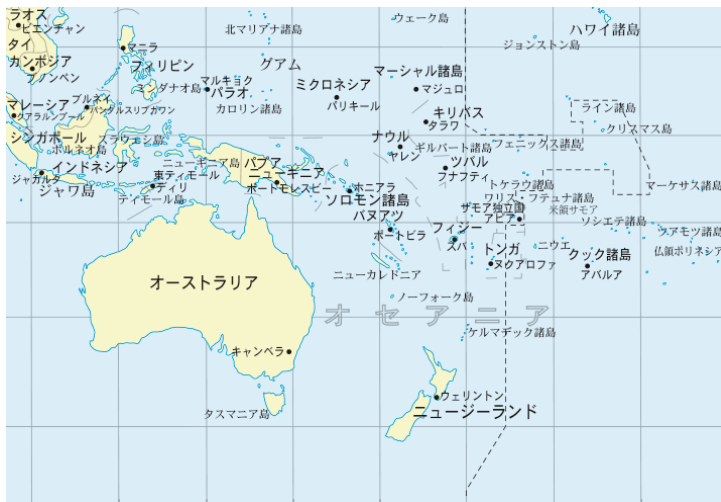
Matriarchal system may form part of Palauan cultural identity. In matriarchal Palauan women benefit from educational opportunities. And many of them are active in various fields of occupational spectrum. However, fingers are pointing at existence of unseen task, which is a misallocation of burden for women. Modern social system does not give Palauan women a special consideration for traditional custom. Some young people of the middle class question the traditional moral values. They will not try to understand traditional culture. However, traditional mechanisms that have supported Palauan society for many years should have provided people with a feeling of security and joy rather than pain and burden. And that mechanism is also the foundation of Palauan behavior in modern times.

In this study, we reanalyzed the stereotypical traditional Palau practice from human behavior. In this survey, we distinguished long-term happiness from short-term happiness and long-term happiness focused on good human relations and altruistic behavior. Regarding short-term happiness, We focused on items such as academic background, income, and preference items. In this study, we measured lifestyle satisfaction using SWLS: Satisfaction with Life Scale, and analyzed subject's attributes, preferences and behavior factors.

From this study, Palau women are responsible for traditional rituals, but we found that they are comfortable from belonging to the group. In addition, the idea for altruistic behavior such as nurturing next generation, donation, and social contribution was positive, and the average value of life satisfaction was high overall in society. On the other hand, despite the high income, although the traditional customs and cooperative relations were negative, the life satisfaction tended to be low.

**Keyword:** Maternal society, Endogenous development, Satisfaction with Life Scale (SWLS),

第1図 ミクロネシア地域の地図



出典：日本政府統計局

第2図 パラオ共和国の地図



出典：パラオ政府観光局

## はじめに

本稿で取り上げるパラオ共和国（以後、パラオ）は西太平洋の小島嶼国であり、19世紀後半頃からスペイン、ドイツ、日本、アメリカなどの大国による統治を受け続け、1994年にアメリカの自由連合国として独立した<sup>1</sup>。パラオはアメリカの自由連合国として独立した後もアメリカ式の政治、行政、教育、医療等の制度を取り入れながらも、パラオ人の内発性の根源ともいえる母系社会の伝統を維持してきた。母系社会を維持している地域は西スマトラのミナンカバウ（前田 2006）、メキシコのフチタン（トムゼン他 1996）、中国雲南のモソ族（遠藤 2001、金 2011、金縄 2016）が思い当たるが、国全体が母系社会の価値観を元にしてしている社会はパラオの他に思いつかない。本研究でパラオを対象にする理由は、「女性にとっての理想の社会」を模索しているからというのではなく、人類が生きる為に限られた土地や資源の分配についての様々な工夫を知ること、持続可能な社会を模索するために必要な知を得られると考えたからである。

かつて、社会学者の鶴見和子は「近代合理性の考え方そのものが西欧社会の内発的発展の結果つくられた成果である」と述べた（川勝・鶴見 2008）。このように考えると、パラオはアメリカの内発的発展の結果として作られたアメリカの諸制度を導入した。このような状況下で、パラオはその生活に根差した内発的発展を成し得るのであろうか。鶴見は、非西欧社会の住民が内発性から外部との接触で得たものを採り入れ、多発的・多系的な発展に到達することは可能であるという（川勝・鶴見 2008）。つまり、西欧合理性の成果物を巧みに採り入れ、地縁・血縁が息づく伝統的な母系社会においても、新たな内発的発展を喚起することは可能であることになる。現時点で、それが本当に可能であるか否かについて確信を持つことは出来ない。しかし、今後、内発的発展に関する議論はパラオにおいてますます重要になることは間違いない。

さて、これまでパラオについて知る時には、文化人類学や国際関係論、植民地研究等に依る所が大きかった。例えば宗教（青柳 1985）、母系社会の構造（須藤 1989）、政治空間（遠藤 2002, 2006）、出産儀礼（安井 2012）、内発的安全・平和（アレキサンダー 2003）等の研究は、現代パラオの生活について知るうえで有益な情報を提供したが、パラオの人々が現在直面する具体的課題を扱うための知識としては不十分なところがあった。筆者は、ジェンダーの視点、母系集団における人々の考え方や行動と様々な現象との関連性を分析することで、今日のパラオが抱える課題を具体的に解決するために必要な知見に辿りつけると考えた。伝統的な母系社会といえども、工夫され長年継続されてきた価値観や生活様式には、「伝統だから」、あるいは「嫌々」ということだけでなく、ひとりひとりがポジティブに生活できる要素が組み込まれていると考えたい。そこで、本稿では特にパラオの人々の考え方に注目し、またヒアリングやアンケート調査の中には

向社会性や利他性、幸福度を確認する項目を組込んだ。

## 1. パラオ共和国の概要

冒頭で、西欧合理性の成果物である理論を巧みに採り入れることで、地縁・血縁が息づく伝統的な社会に、新たな内発的発展を喚起し得るとする鶴見の見解を述べた。本節では、西欧社会のアイデアや技術を受容する側となるパラオの地縁・血縁が息づく生活世界を概観する。

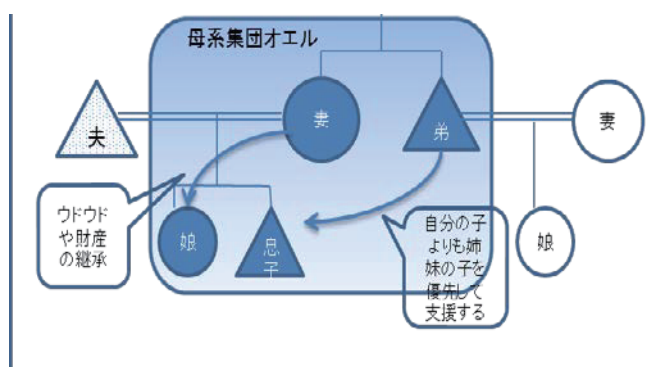
### (1) 社会の特徴

パラオの陸地面積は 488 平方キロメートルで、日本の屋久島 (504.88 平方キロメートル) と同程度の大きさである。西太平洋カロリン諸島の西端、北緯 3~8 度、東経 130~134 度に位置しており、気候は熱帯海洋性気候で年間平均気温は 27 度~28 度で推移し年間を通じて変化が少ない。

パラオの人口は約 1.7 万人 (2014 年) で、その約 7 割が隆起珊瑚の小島にあるコロール島で生活する。政体は各州を統括する連邦政府で、伝統的に島を二分割統治した二大首長を頂におく首長体制が併存している。パラオ憲法は「首長会議」を設置し、伝統に属する領域や慣習地における問題解決の権限を与えている。パラオは、伝統の政治とアメリカ式の政治とが形式的には併存する国家運営を行っている (須藤 2012)。この屋久島程度の大きさの国家は伝統首長体制に沿った集落を基準とした 16 州から構成されており、そのうち 10 州はコロール島北部のバベルダオブ島 (334 平方キロメートル) にある。コロール州とアイライ州を除く他の地方州の人口は 3247 人 (2014 年) である。そして、これら 16 州が独自に憲法を有している。アレキサンダー (2003) が「村、大家族、地域などに対するアイデンティティーが国に対するアイデンティティーより強い」と指摘するように、地方州には固有の文化が根強く残り、時には中央政府のそれに勝る。これを鶴見の視点で捉えれば、内発的発展を導き出すパラオ住民のアイデンティティーは、村、大家族、地域にあると考えられる。

### (2) 母系社会の女性

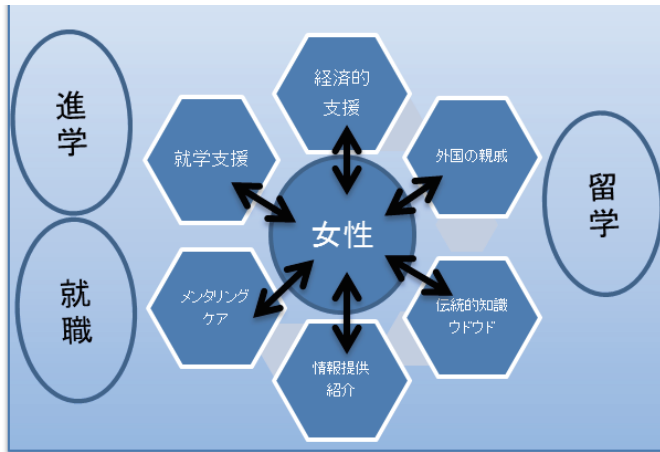
第 3 図 母系社会の仕組み



パラオはアメリカの影響を強く受けているとされるが、伝統的な親族集団とその役割は今なお重要な存在である。その役割に対する内発性を支えているのは母系社会の価値観であると言ってよい。この価値観は明文化されないため、部外者にとっては非常に分かり難いが、パラオの人々の言動から確かに存在していると認めざるを得ない。パラオ人は通常は母方の集団 (オエル) に所属するが、父方集団 (ウレエル) あるいは両方の集団に属する場合もある。

第 3 図に記したように、母系社会の家族では異なる集団に属する夫よりも妻とその男兄弟との協力関係が強い場合がある。2016 年 8 月にヒアリングした I (30 代女性) によれば、「パラオ人は関係度に濃淡のある複数の母系集団に所属していて、遭遇したシチュエーションによって使い分ける」 (廣瀬 2016a)。しかし、親族集団との関係は自分が望むか否かにかかわらず、自動的に巻き込まれる<sup>2</sup>。母系社会では母系集団の力は大きく、地位の継承や財産の相続においては母系集団の系統が正統として優遇される。しかし、聞き取りから、実際の生活では母系親族が絶対的優位にあるわけではなく、あくまで相対的、総合的なものであるとの複数の証言があった。

第4図 母系集団の女性による相互支援



礼の社会的位置づけをうかがうことが出来る(Office of Planning & Statistics 2014)。そのため、第4図に見られるような同じ親族集団に属する女性同士の強い協力関係が生まれる。

パラオの女性は母親から年齢にふさわしい首飾りを受け継ぐ。それはウドウドと呼ばれるもので、パラオ語の財貨を意味する。ウドウドの価値は歴史的・社会的に決まる。ウドウドはそれが集団間の交換行為の中でどのような意味を持ってきたかという点が重要で、女子はウドウドを受け継ぐ時に母からそのストーリーを口承伝承で学ぶ。無文字社会であった頃の継承方法であり、現在でもそのストーリーを文字に起こすことは好ましくないとする意見もある(Kesolei 1997)。ストーリーには集団の秘密、血縁の秘密や財産の秘密も含まれるとされており、パラオの女子は成長に伴って価値の高いウドウドを継承していく。莫大な経済的支出を伴うシュウカンには、学校の新学期の頃に子どもの教材を購入することが後回しにされる事例も見られ、子どもの教育に悪影響を及ぼすとの意見があったことから、その簡略化や生活改善の話題が国家レベルの「パラオ女性会議」で毎年のように議論される定番の議題である<sup>4</sup>。

シュウカンに向けられた不満の声も多くあるものの、シュウカンによる人間・社会関係の維持は重視され、パラオの家族や親族関係を維持するうえで重要な「パラオの国民文化」(須藤 2012)として認識されている。不満の声は、個人の持つ「道徳(moral)」感情が社会で共有される「倫理(ethics)」との認識のズレから生じているとも考えられる。パラオの親族集団に見られる協力のメカニズムは、パラオの限られた土地と資源の中で人々が持続的に暮らしていく必要性から生まれたものと考えられると、改めてそのメカニズムを理解し、時代に合った形に修正することによって、「不満」を改善させる道を見つけることが出来るかもしれない。協力行動とは、ある個体が他の個体に対して利益を与えることである。そのように考えれば、人間の協力行動は、より複雑なメカニズムとして成り立っている。協力行動が進化するメカニズムは、主に血縁淘汰理論と互惠性理論(直接互惠性理論、間接互惠性理論)の2つが知られている。また、脳科学の領域からも協力行動を含むモラルファンデーションへのアプローチが見られる。金井(2013)は「脳について知れば知るほど、近代に成立した「合理主義」が人間にとって不自然に感じられる」、「困った人を助けたいという感情は、自分の経済利益の追求という観点からは極めて非合理的である」と指摘し、しかし、人間の行動の動機がすべて自己利益の追求であるわけではなく、人間の行動を研究する人文・社会科学の領域においても理論と実際の経験や観察と照らし合わせて検証することにより知見を構築していく実証科学(empirical science)の採用を進めるべきであると提唱している。

## 2. パラオの親族集団と人々の価値観

### (1) 新しいアプローチの必要性

パラオ社会を考える時、母系制、親族集団、相互扶助がキーワードになることが多い。しかし、これらに

パラオの伝統的儀礼はしばしばシュウカン(Siukang)と呼ばれる。シュウカンは日本語が起源であるが、もともとパラオで行われていた儀礼を総じて呼ぶ言葉として採用された。パラオの儀礼は同族集団の結束力を高めるほかに、婚姻を通じた親族の拡大の意味からも重要な行事である。儀礼の主催には多額の費用が必要である<sup>3</sup>。この費用のやりくりで、母系集団の女性に経済的な負担や管理運営能力が求められる。2014年の統計では、家計の年間支出の平均で教育への支出が240米ドルであるのに対して儀礼(Ceremony)に支出される金額が1590米ドルとなっており、儀



関するデータの希少さから実証研究は困難であった。また、親族集団に関係する知識は外部の人間に対しては特に厳しく秘密とされていて、人類学的・民俗学的な聞き取りによって知ることもまた難しいものであった。しかし、先へ進むためには、難しいからと言って、避けて通れない道がある。取りあえず、パラオの人々の協力的行動のメカニズムの表層部をしるだけであれば、母系集団の人間関係の詳細や知識ではなく、その協力的行動を実証的に測ることができるのではないか。そこで幸福研究の手法に注目した。母系社会の人々の行動を考える時、互惠性(reciprocity)、協調行動(cooperation)、地位(status)、尊敬の念(esteem/self-esteem)、社会認識(social recognition/local recognition)<sup>5</sup>等は重要な項目となる(フライ 2012)。これらの項目は奇しくも幸福の経済学を研究の分野でも幸福度を測る指標として使われている。幸福度を統計的・客観的に調べるには、例えば神経経済学のように脳の血流を機能的磁気共鳴装置(fMRI)で測る方法もあるが、なかなか気軽に利用できる方法ではない。しかし、合理的側面の主観的幸福(SWB: subject well-being)に注目し、行動や制度の特徴を測ることで<sup>6</sup>、様々な要因が自己申告による主観的幸福と関係があるかどうかを実証的に分析することは出来る。

幸福度のデータは統計的な数値であるので、例えば「ボランティアをしている人の幸福度は高いことが知られているが、人がボランティアをすれば必ず幸福になれるわけではない」。また、「幸福な人は他人も幸福になれるよう進んで力を貸す」とされるが、これも統計上の傾向にすぎない。しかし、主観的幸福度を測ることは人間の基本的な振る舞いをざっくり理解しモデリングするために役に立つ。人が感じる価値の大きさは客観的な数値に比例しないと、カーネマンの「プロスペクト理論(prospect theory)」が指摘するように、その土地に生活する人々の主観的な幸福度と生活習慣や価値観を分析することで、生活改善や行政改革などに応用できる新しい知見を得る機会が増えるだろう。内発的発展による開発という時、何をもって地域の人々の内発性を考慮するか、例えば、幸福研究の知見を借りれば、幸福の根底的な要因として、自律/主体性(autonomy)、能力(competence)、社会や人との関連性(relatedness/social relations)は内発的動機付けと密接な関係があることを応用することが出来るのではないだろうか。

## (2) 親族集団の相互協力関係と幸福研究との相性

親族集団やコミュニティの人々との良好な関係性は、社会的生物としての人類の生存戦略にも関係が深いという人類学者の研究も多い(ホッジ 2017)。タンザニアのハッザ族の集落における「うつ状態」を調べるテストでは、将来への希望や仲間との関係、暮らしに満足しているかなど、21項目について聞き取りを行ったところ、11点以上が「軽度のうつ状態」、31点以上が「重度のうつ状態」を示すところ、2.2点と極めて低い点数であった。ちなみに、健康な日本人の同テスト結果の平均値は8.7である。狩猟採集生活をしているハッザ族の暮らしは、採集した食糧をすべての成員で均等に分ける「平等」な生活である(ホッジ 2017)<sup>7</sup>。平等と脳の(孤独、不平等、不安に反応をする)扁桃体の関係性を調べた「お金を分け合う実験」でも、平等や公平感(sense of impartiality)を感じている時には扁桃体は活動しないことが分かっている。そのため孤独、不平等、不安を減少できれば「うつ病」の発症を抑えることが出来るとも言われている。また、社会的立場の違いによって「うつ病」の発症状態が変わることが分かっており、人間関係のストレス度が病気に関係していることも指摘されている。文明社会では階級に応じて分け前が決まり、立場が低い人は高い人に比べて常に強いストレスを感じやすい。そのため、自らの判断で仕事をする人よりも、上司からの命令で仕事を行う非技能職に2倍以上うつ病患者が多いという。扁桃体が過剰に働くような不平等、不公平な「アンフェアな提案」に対して、人間はそれを拒否する「互酬的報復(reciprocal retaliation)」の行動を取る。

フライ(2012)によれば、一般的にコミュニティにおいて平等感が得られる条件下では、人は他者の幸福(well-being)を尊重する。また、半自給自足を可能にするサブシステンス(subsistence)、名声やタイトル(title)の有無、自己決定(self-determination)、そして、男性であるよりも女性の方が主観的幸福度をやや高くする。また、クランや親族集団の関係にも関係するだろう義理/忠誠(loyalty)、責任/信頼

(responsibility), 自己啓発 (personal development), ローカル・アイデンティティ (Local identity/Local knowledge) も幸福度に関係性が深いとされる。このように考えると, 実証的なデータを用いてパラオの親族集団のメカニズムを捉えることで, パラオの人々の健康や経済活動をこれまでと異なる視点で見ることができる。加えて, 人類共通の協力メカニズムにもアプローチすることが出来るかも知れない。この点からも, 親族集団の相互協力のメカニズムを知ることと幸福研究の手法とは相性が良い点が多いだろうと考えられる。

### (3) 幸福感と生活満足度

幸福感には大きく 2 種類あるとされる。それは「短期的な幸福感」と「長期的な幸福感」である。前者は快楽主義 (hedonism) 的で刹那的快樂, 後者は幸福主義 (eudaimonism) と関係が深い。パラオで考えてみれば, ビートルナッツ (ビンロウ樹の実) を噛むことは短期的な幸福, 収穫した魚介類を高齢者に分ける行為は人間関係や社会的信用を高めることが予想されるので長期的な幸福に関係する。幸福に関連する要因としては, 年齢, 性別, 健康, 信仰心, つながりの多様性, 目標が明確であること, ボランティア活動をしていること, いざという時に頼れる人がいること, 物事に感謝していること, 外交的であること, 目標を達成していること, などがある。また, 物質的消費より体験的消費 (運動や創作) の方が主観的幸福を増すことも知られている。テレビや映画を観るよりも運動, 園芸, スポーツのほうが主観的幸福を増すこともわかっている。パラオの人々の日常生活の要素から, 主観的幸福と客観的幸福, 幸福に関係しそうな要因 (文化差, 実験条件) を測り, 両者を比較することによって何が幸福に影響するかを明らかにする研究がある。統計的に有為な結果が出れば, 要因と幸福感に相関があるということになる。

幸せになる為の目標に誤って設定 (フォーカス) してしまうことを, ダニエル・カーネマン (Kahneman 2006) は「フォーカシング・イリュージョン」と呼んだ。カーネマンは「人は所得などの特定の価値を得ることが必ずしも幸福に直結しないにもかかわらず, それらを過大評価してしまう傾向がある」と指摘する。カーネマンは「感情的幸福」はある収入までは収入に比例して増大するのに対して, その金額を超えると比例しなくなると指摘した。「ある収入」とは, その社会で基本的な生活 (衣食住, 身の安全, QOL) に支障が無い程度の収入, かつ周囲の生活と差が無い暮らしが出来る収入である (社会によって異なるだろう)。フランク (H. Frank 2007, 2008) は, 周囲との比較で満足を得るものを「地位財 (positional goods)」, 他人との比較とは関係なく幸せが得られるものを「非地位財 (non-positional goods)」と分類した。「地位財」は例えば所得や貯蓄, 役職などの社会的地位, 家や自動車などの財産で「長続きしない幸せ」である。一方「非地位財」は健康, 自由, 愛情, 良好な人間関係など「長続きする幸せ」を指す。ネトル (Nettle 2007) は両者の違いは「幸福の持続性が異なる」と説明し, 非地位財が地位財に比べて持続性があるとしている。しかしながら, 他人との比較優位に立てる地位財をめざし, 次から次へと幸福を追い求める行動を「快楽のランニングマシン (hedonic treadmill)」と呼んで, それに振り回されないようにと警鐘を鳴らす。現代文明は人類を過度に競争に掻き立てているが, そもそも動物としての人類の目標が子孫の繁栄であったとすれば, 例えば, コミュニティメンバーが皆で協力して, 子どもを育てるための安心・安全な社会を構築することは重要なミッションであろう。このように考えれば, 利他的に振る舞い共存共栄を図ることも生物学的な共生と同様に有効な手段である。

## 3. パラオにおける親族集団と女性の関わり

### (1) これまでの研究の道筋

ここでは, パラオの内発的発展を支える価値観と人材育成の側面に注目しながら, 母系集団における女性の日常について, 幸福研究の視点を盛り込みながら見ていきたい。廣瀬 (2010) は「パラオにおける女性の自己実現と教育機会—伝統的慣習と親族組織からの期待の中で—」において, パラオが母系集団を優位とす

る人間関係社会であり、女性は集団の維持・発展における女性の役割や負担が大きい、その結果として女性の社会参加が進んだことを指摘した。次に、廣瀬(2013)は「パラオ女性の日常生活とその変化—『仕事とライフ・イベント』に適した社会デザインを模索して—」で、パラオでは女性が親族集団の儀礼を主催することから、同じ親族集団の女性が良い仕事に就くことは親族集団の発展にとってもプラスなことであり、就職情報の交換や家事育児への協力をしている様子が報告された。パラオでは結婚・出産後もキャリアを継続することは一般的で、産休・育休中にカレッジで資格を取る女性がいることが報告された。また、一般的な家庭でも家事・育児をさせるための外国人労働者を雇っているケースも多く、かつて相互扶助として育児や家事を手伝っていた親族組織の若い女性も賃金を要求するようになっており社会的な変化についても課題が投げかけられた。廣瀬(2014)は「ミクロネシア島嶼世界と教育制度—パラオの歴史(1885年—1994年)から考える内発的発展についての試論—」で、パラオの生活における伝統的な枠組がかつての宗主国の文化を受容しながらどのように文化的な再構築を経験し、教育観・労働観に影響を受けてきたかについて明らかにしている。その中で、日本の統治下でパラオの女性が医療専門職の経験を積み、アメリカの統治下でパラオの女性が信託統治政府の公務員を経験したことが、パラオ女性の伝統的な役割と上手く融合していった様子を明らかにしている。廣瀬(2016ab)はそれぞれ「小島嶼国家の内発的発展と人材育成—パラオ共和国の教育基本計画を参考に」「小島嶼国家の内発的発展と人材育成(2)—パラオにおけるアイデンティティと教育—」の中で、かつての伝統的な枠組と今を生きている女性の考えや意見について、統計資料や聞き取りからまとめている。

その中でも、そもそもパラオ人は伝統的な価値を本当に重視しているのか、パラオの女性は本当に優位な立場にあるのか、女性の負担はそれほど大きいのか、同じ親族の女性は皆協力的なのか、という疑問は払拭されていない。パラオの現象として述べられていること、例えばパラオの女性は強い、親族の相互協力の強さ、伝統的価値の重視等は、観察をしていると確かにその通りに思えることが多々ある。そして、聞き取りの結果も、そのように思える反応が返ってくる。しかし、皆が同じ温度ですべての価値を共有しているかどうか、本当のところは分からないことは多い。そこで、パラオの女性の内面を垣間見る目的で、幸福度という指標を新しい切り口として用いてみることにした。

## (2) 幸福と生活満足度

幸福(happiness)には快樂も含まれる。例えば、ドーパミンは快樂や幸福感を増幅する。ドーパミン受容体が元気である若いうちは幸福感が比較的高くなるが、青年期を過ぎると徐々に衰退していく<sup>8</sup>。そのように考えると、ドーパミンによる刺激を増やすために効果があるとされるスポーツ、特に有酸素運動がもてはやされることも頷ける。チクセントミハイ(Csikszentmihaly)は、人間の行うおかしな行動も外的要因ではなく行為そのものが動機になるといい、次にすべきことも明確で、今の行動に集中していて、かつ続けて没頭したいと感じる作業をフロー体験と呼び、日常生活の中にフロー体験がある人はそれが無い人に比べて幸福度が高いと指摘している。パラオでは、高齢者がビンロウ樹の実を入れる籠や釣りの道具等をこつこつ作っている様子を見る機会も多い。その他、幸福度に関係する要因には「いかに早く逆境から立ち直れるか」というレジリエンスの高さ、何かあった時に助け合える家族や友人の存在、自然の恵みにあやかって暮らしていけるサブシステンス(subsistence)、友人や仲間との良好な関係(relationship)、自分の可能性を追求して能力を伸ばすこと(personal growth)、コミュニティへの帰属等がある。2003年から2005年、筆者がパラオの省庁で2年間働いていた時に、仕事を解雇されて「これで、明日から好きなだけ釣りができる」と喜んで帰っていった同僚の姿を見たことがあった。その時には負け惜しみの表現かと思っていたが、必ずしもそうではないという可能性もある。

人間は社会的動物(social creature)といわれるが、日常的なフロー体験以外に自分たちで収穫した野菜を食べ、友人や近所と分け合うことで親密な関係を構築していく。人の絆や交流(social bonding)は人間の脳

に本質的 (intrinsic) な喜びを与える。そうでなければ誰も協力しないだろう。実際、社交の場に被験者を置き、協力か競争をさせると、互いに協力する方を選ぶ。そして、その時にドーパミンが大量に分泌されていることがわかっている。親切な行動をすること自体が、人の幸福度を上げるのである。

さて、幸福度に影響を与える要因は多くある。例えば、前野 (2013) が「幸福に影響する要因 48 項目」として紹介している。これを大きく分類すると、①年齢、性別、健康、宗教、②結婚、対人関係、社会的比較、感謝、親切、③性格、気質、④目標、教育、学習、成長、⑤収入、雇用、消費、生活、趣味、⑥政治、安全、文化、その他に分けられる。先述した「長続きしない幸せ」は、例えば、ゲームで勝った、お金を儲けた、お酒を飲んだ、テストで合格したなど、その時には嬉しくてもやがてその幸福に慣れてしまい、時間と共に低減していく地位材である。この幸福は、刺激に満ちた都市生活や若い時にはより多く得られるかもしれない。しかし安定してその人物が幸福度の高い状態であるかは必ずしも分からない。一方で、「長続きする幸せ」は、人間関係の安定や信頼の構築とも関わっていて、それを得るためには手間暇がかかるが、その後は比較的安定した幸福感を与える。パラオの親族集団の女性の価値観と行動を見るには、より長期的な視野が必要であることから、非地位材をより意識した調査が必要であろう。そこで、筆者は「長続きする幸せ」を測る指標として複数の国や地域で試みられているディーナーの生活満足度 (SWLS: Satisfaction with Life Scale) を使用することにした。この調査で質問する生活満足度の指標は、その瞬間の幸福度よりも人生を振り返って考える質問があり、より長期的な幸福度に関する状態を知ることが出来る。

### (3) 調査に当たって

パラオで幸福度に関するデータを収集するためには、調査対象者、調査方法、回答方法、質問内容、文化的な背景など様々な点で注意が必要である。本調査では、今後実施する大きな規模の調査を想定した事前準備として 41 名 (女性 30 人、男性 11 人) に質問紙調査及び補足的なインタビューを行った。年齢層は 20 代 3 人、30 代 10 人、40 代 9 人、50 代 9 人、60 代 4 人、70 代 2 人、80 代 2 人、年齢の無回答 2 人であった。調査対象についての課題は、対象者の属性にばらつきが出やすいことである。中央、地方問わず役所の職員や教員は回答を得やすい。一方で、地方の高齢者や自営業者についてはアプローチが難しい。特に高齢者はパラオ語での補足説明が必要なため、調査の際には調査について熟知したパラオ人の協力者が必要である。そのため、今後の調査では該当する人材を複数人雇用して実施することが必要である。

今回行った調査では、質問紙表のセクション 1 で、年齢、性別、出身州、世帯構成数、学歴、職業、年収、伝統的タイトルの有無等について質問した。このセクションで難しかった質問は、出身州である。実際、回答者からは複数の回答をしたいと申し出があった。その中には 4 つ回答したいという者もいた。この項目は質問としては失敗であったが、1. (2) で述べたように、パラオ人が母親の母系親族集団だけでなく、複数の集団に属し、適宜使い分けることがあるという現象を裏付けるうえでは得るものがあつた。学歴については、パラオ人が日本に留学することもあり、専修学校・専門学校の項目が欲しいとの要望があつたが、今回は準学士の項目に分類した。

続く、セクション 2 では、ディーナーの人生満足尺度を採用した。5 つの質問をして、7 段階の回答 (強く同意する 7 点、同意する 6 点、やや同意する 5 点、どちらでもない 4 点、やや同意しない 3 点、同意しない 2 点、全く同意しない 1 点) の合計から人生満足度を測るとというのが幸福学の父エド・ディーナーの開発したスケールである (第 5 図)。5 つの質問とは次のようなものである、①私の生活はほとんど理想に近い、②私の生活の状態は良好である、③私は私の生活に満足している、④私の人生で私の望む重要なものを得た、⑤生まれ変われるなら、これまでと同じ人生を歩みたい。この質問に対する回答の合計点で人生満足度を次のように 7 段階 (非常に満足 31~35 点、満足 26~30 点、やや満足 21~25 点、ニュートラル 20 点、やや不満足 15~19 点、不満足 10~14 点、全く不満足 5~9 点) で測る。



第 5 図 ディナーの人生満足度

Below are five statements that you may agree or disagree with. Using the 1 - 7 scale below, indicate your agreement with each item by placing the appropriate number on the line preceding that item. Please be open and honest in your responding.

- 7 - Strongly agree
- 6 - Agree
- 5 - Slightly agree
- 4 - Neither agree nor disagree
- 3 - Slightly disagree
- 2 - Disagree
- 1 - Strongly disagree

\_\_\_ In most ways my life is close to my ideal.

\_\_\_ The conditions of my life are excellent.

\_\_\_ I am satisfied with my life.

\_\_\_ So far I have gotten the important things I want in life.

\_\_\_ If I could live my life over, I would change almost nothing.

- 31 - 35 Extremely satisfied
- 26 - 30 Satisfied
- 21 - 25 Slightly satisfied
- 20 Neutral
- 15 - 19 Slightly dissatisfied
- 10 - 14 Dissatisfied
- 5 - 9 Extremely dissatisfied

この生活満足度調査と合わせて次の質問をした。性別・年齢集団の参加頻度、両親以外で日常の問題について相談する親族の有無、コミュニティに対する責任感の強さ、道具や民芸品を日常的に作る習慣、頻繁にビンロウ樹の実（ビートルナッツ）を噛む習慣、自分の畑の野菜や果物をお裾分けすること（利他行動）、緊急事態が起きた時に頼れる親族の人数、若者に対する助言の頻度、自分の発言の周囲への影響力、学歴や職業と比較した親族集団への帰属感、親族集団に所属していることによる精神的安心感、着飾って公共の場に出ていく頻度、友人との長話の頻度、金品の寄付の頻度（利他行動）、パラオの高齢者は幸福であること、自分も高齢になったら幸福になると思う、パラオでは女性よりも男性が幸せ、パラオでは男性よりも女性が幸せ、釣りは興奮する、フルーツを収穫すると興奮する、ルールを守らない人に注意する（利他的な罰）、自分の周りの出来事は何でも知っておきたい、他人からの評判を気にする（間接互惠性）、シュウカン（ceremony）は負担が大きいので好きではない、シュウカンは人とのつながりを維持するために重要だ、皆でする作業に参加する、個人の利益よりコミュニティの利益は大事だ（利他行動）、コミュニティのことを考えない行動をする人は尊敬されない（利他的な罰）、コミュニティに守られている感じがある、毎週教会に行く、ベビーシャワー（第一子出産の儀式）に参加する、みんなの前でダンスをする、会合で意見を言う、高齢者の意見は尊重されるべきだ、コミュニティに貢献したい、お互い助け合うことは大事だがフリーライダー（タダ乗り）は責められるべきだ（利他的な罰）、伝統的な文化や自然を次世代に残したい（利他行動）、年配になれば自分の意見はより尊重される、次世代が幸せになるように助けたい（利他行動）、課題を解決する時に一番頼りになる親戚、住民は自分が出来る範囲でコミュニティに貢献すべき、等である。

パラオを代表する行事であるシュウカンについても、経済的負担が大きいと嘆きながらもパラオの伝統だからという諦めにも似た意見を述べる者もいる。しかし、経済ゲームの限られた実験環境での話であるが、過去に他人へお金を寄付した人は他人からより多くのお金を寄付してもらえると（Wedekind 2000）という興味深い実験結果もある。その他にも、利他的な行動を取ってきた人は良い評判を築き、結果的に周りからのサポートが増えて利益が大きくなる、直接助けた人からの返礼が無くても（直接互惠性が無くても）その人の評判は内集団内で残り続ける（間接互惠性）、といったパラオのシュウカンとも関連深そうな実験結果がある。もしかしたら、シュウカンでの寄付行為も、他人に見られていることで思い切った寄付行動をしてしまう観客効果（audience effect）の影響と考えると興味深い実験結果である。

パラオを代表する行事であるシュウカンについても、経済的負担が大きいと嘆きながらもパラオの伝統だからという諦めにも似た意見を述べる者もいる。しかし、経済ゲームの限られた実験環境での話であるが、過去に他人へお金を寄付した人は他人からより多くのお金を寄付してもらえると（Wedekind 2000）という興味深い実験結果もある。その他にも、利他的な行動を取ってきた人は良い評判を築き、結果的に周りからのサポートが増えて利益が大きくなる、直接助けた人からの返礼が無くても（直接互惠性が無くても）その人の評判は内集団内で残り続ける（間接互惠性）、といったパラオのシュウカンとも関連深そうな実験結果がある。もしかしたら、シュウカンでの寄付行為も、他人に見られていることで思い切った寄付行動をしてしまう観客効果（audience effect）の影響と考えると興味深い実験結果である。

4. 人生満足度とパラオ社会の女性

(1) 人生満足度とカテゴリー

人生満足度の合計が 31～35 点の者は人生満足度が「非常に満足」に分類される。調査対象者 41 人のうち 9 人が該当し、5 人が 50 歳以上、2 人が 30 歳代、1 人が 20 歳代であった。人生満足度が「満足」に分類される 30 点～34 点の者は 13 人、うち 9 人が 50 歳代以上、4 人が 40 歳代であった。人生満足度が「やや満足」

に該当する 21～25 点の者は 8 人で、20 歳代と 30 歳代であった。人生満足度が「やや不満足」に該当する 15～19 点の者は 41 人のうち 4 人で年齢は 30 歳代後半から 40 歳代であった。

年齢と人生満足度の関係では、若い者よりも中高年が比較的高いと言える。学位については、「非常に満足」9 人のうち 4 人が準学士、2 人が学士、1 人が修士、1 人が高卒、1 人が小学校卒（ただし、88 歳で旧制の小学校）、「満足」に該当する 13 人のうち 7 人は準学士以上であった。ただし、年齢層が高い人は高校卒が多い。パラオの高等教育機関はコミュニティカレッジのみであり、準学士が一般的である。

仕事については、41 人のうち 28 人が常勤、7 人が非常勤で働いている。無職で仕事を探しているのは 1 人（やや満足）で、定年退職者は 3 人（満足 2 人、非常に満足）であるが、人生満足度は比較的高い。次に、伝統的タイトルの所持について見てみる。伝統的タイトルの所持について「答えたくない」と回答したのは 41 人のうち 2 人で、予想に反して多くの者が回答した。「わからない」は 7 人だった。「すでに持っている」は 10 人で、「いずれ持つ予定がある」と答えたのが 8 人、「持つ見込みはない」と答えたのが 11 人だった。人生満足度が「非常に満足」だった 9 人を見ると、4 人が「すでに持っている」、3 人が「いずれ持つ予定がある」、1 人が「わからない」、1 人が「持つ見込みはない」という結果であった。一方、人生満足度が「やや不満足」では 3 人のうち 2 人が「わからない」と回答した。また、伝統的タイトルと収入の関係を見ると、タイトルを「すでに持っている」「いずれ持つ予定がある」と答えた者は 17 人であったが、5 人が年収 9,999 ドル以下、9 人が年収 24,999 ドル以下のカテゴリーに分類されており、必ずしも収入が高いわけではない。タイトルについて「答えたくない」、「持つ見込みはない」と答えた 9 人のうち、4 人が 25,000 ドル～49,999 ドル、3 人が「答えたくない」、1 人が 50,000 ドル～74,999 ドル、1 人が 10,000 ドル～24,999 ドルであった。伝統的タイトルは、親族集団での立場に関係する要因であるが、それを持つことで行われる「何か」と人生満足度の間には深い関係があるのかもしれない。

## （2）快樂と幸福

パラオでは伝統的な工芸品として、男性は木工細工や漁具、女性はパンダナスの葉で編んだ蓆や籠が作られる。地方に行くとき高齢者がよく作っている姿を見る。幸福研究では、チクセントミハイが指摘したように手作業に集中してフローの状態にある時は幸福度が高いとされる。パラオではどうだろうか。

日常的にもの作りや手作業をしているかどうかを尋ねる質問で、「まったく当てはまらない」「当てはまらない」と答えた 16 人について見ると、女性が 14 人、男性が 2 人であった。16 人のうち人生満足度「やや満足」21～25 点が 6 人、「やや不満足」15～19 点が 3 人だった。16 人のうち 7 人の収入が 25,000 ドル～74,999 ドルの範囲にあり、パラオの中では所得が高い。この 16 人のタイトルの所持について見ると、11 人が「答えたくない」、「持つ見込みがない」、「わからない」と回答していた。ここから推測すると、伝統工芸や漁法に関心がない人は、伝統的タイトルにも縁が少なく、その代りに収入を多く得ることに努力したが、親族集団による伝統的慣習が多い社会において生活満足度は比較的低くなる。

パラオの嗜好品としてはビンロウ樹の実を噛む（チューイング）が有名である。ビンロウ樹の実を噛んでいる時の気分が高揚している様子を見ると、明らかに幸福度が上がっているように思えるのであるが、人生満足度と照らし合わせてみると、必ずしも明らかな関係性を見出すことが出来なかった。次に、自分の家の畑で収穫された野菜などのお裾分けについての質問では、41 人のうち 29 人が「まったくそう思う」「そう思う」と答えた。しかし、逆に「そう思わない」、「まったくそう思わない」6 件の回答を見ると、人生満足度が 15～19 点の「やや不満足」の該当者は 2 人であったが、その他 4 件は収入が 25,000 ドル～49,999 ドルが 3 人、100,000 ドル以上が 1 人とパラオの平均収入を大幅に上回っている。

ドネーション（寄付）もパラオの風物詩である。企業や政治家は学校や慈善団体に寄付をしてその金額と寄付者の名前を横断幕やポスターで知らしめる。ドネーションを目的としたマラソンイベント等も多い。その他、職場ではライフ・イベントごとに寄付が求められ、寄付する箱と帳面が回ってくる。いつももらう側

で自分は寄付しない者の評判が悪くなることは、パラオで生活したことのある者なら誰しも経験することだろう。また、葬式も大きな寄付イベントである。葬儀会場にはテントが立てられて母系親族集団の女性が数人机に並ぶ、そして大きな争議では銀行員が同席して会計を行う。伝統貨幣の他、アメリカドルの現金が行き交う。そして、会場のマイクや場合によってはラジオ放送を通じて、どこの州の誰がいくら誰に寄付をしたかという情報が延々と伝えられる。パラオでは一般的な寄付行為であるが、41人中16人が「ほとんどいつも行う」と答えている。「行う」も19人であった。ほとんどの者が寄付行為を日常的にしていると答えていて人生満足度による比較は出来ないが、一般的には寄付行動は脳の報酬系によって満足感がもたらされることが知られている。パラオの場合は、非協力的な者への風当たりも強いので、批判されることを避けるために寄付行動を強いられていると感じているのであれば、人生満足度は低減することも有りうる。

実際、フリーライダーを見かけたら注意するかどうかを訊ねると、41人のうち17人が「全くそうだ」と答えた。「そうだ」と回答した12人と合わせて29人がフリーライダーを咎める行動をしている。しかし、コミュニティのことを考えない人は尊敬されないかという質問に、41人のうち13人が「まったく同意する」と回答する一方、5人が「あまり同意しない」、7人が「全く同意しない」、7人が「どちらとも言えない」と答えている。このように見ていくと、パラオ人は周囲の人間関係に敏感そうである。そこで、自分の周囲で起きている出来事はすべて知っておきたいかについての質問をすると、41人のうち16人が「全くそうだ」、13人が「そうだ」と答えた。29人が周囲の出来事にアンテナを張っている。親族集団での自分の評判を気にするかについての質問に対しては、41人のうち14人が「全くそうだ」、9人が「そうだ」と回答した。「まあそうだ」まで含めれば、自分の評判はかなり影響がある要素のようである。親族集団の密な人間関係と比較するとコミュニティという少し広い関係の中では、協力の度合いは弱くなると考えてよいだろう。

寄付や財政的負担と言えば、パラオではシュウカンが有名である。そこで、シュウカンは経済的負担が大きいの好きではないことを尋ねる質問をしたところ、41人のうちわずか8人が「全くそうだ」と答え、12人が「そうではない」、13人が「全くそうではない」と回答した。パラオでは、シュウカンはお金がかかって嫌いだという話をよく聞くが、額面通りではない意味を持っていると言えそうである。実際、シュウカンは親族集団や利害関係者との関係構築や維持のために重要な役割を果たしているかを尋ねる質問に対して、41人のうち26人が「全く同意する」、8人が「同意する」と回答した。少数派ではあるが「どちらともいえない」、1人が「あまり同意しない」の回答者は、伝統的タイトルを持たず、収入は高めという傾向があった。

### (3) 帰属意識と幸福

仕事や学歴よりもクランに帰属感を感じるかについての質問では、41人のうち30人が「強く感じる」「感じる」と回答した。しかし、人生満足度と見比べると、30歳代より若い者は中高年に比べて人生満足度が低い。このことから、クランへの帰属意識は高くても若いうちは年長者への恭順や奉仕活動等の負担が大きいのと感じている可能性もある。一方で「やや感じない」「感じない」「まったく感じない」と回答した者は3人でタイトルを持っていない、持つ見込みがない者で、年収がやや高い傾向が見られた。また、クランによる精神的安心感についての質問では、クランへの帰属意識とほぼ同様であった。自分よりも若い人たちに日頃から助言することがあるかについての質問で、41人のうち20人が「まったくその通り」、18人が「その通り」と答えており、パラオでは年下の者の面倒をよく見る習慣があることがわかる。今回の質問での人生満足度との関係性は不明であるが、パラオの人生満足度自体がそもそも日本などの数字と比較しても高いことから、若者への面倒見の良さなどの要因はパラオの全体的な人生満足度を引き上げている可能性はある。自分の意見がコミュニティで尊重されているかを質問すると、41人のうち11人が「まったくその通り」、22人が「その通り」と答えており、多くが自分の意見は尊重されていると感じていることが分かる。人生満足度との相関性は明らかではないが、60歳以上の高齢者で自分の意見が尊重されていることに「まったくその通り」と回答した人の人生満足度は非常に満足31~35点、満足26~30点のカテゴリーに集中している。

年齢・性別集団（パラオではボーイズグループ，ガールズグループと呼ばれる）への参加頻度を質問すると、41人のうち5人が「頻繁に参加する」、5人が「よく参加する」、16人が「たまに参加する」、10人が「ときに参加する」、3人が「稀に参加する」と答えた。年齢に関係なく、年齢あるいは性別の集団に参加している様子がうかがえる。人生満足度との明確な関連性は見いだせないが、収入が50,000ドル以上の者は年齢・性別集団に参加することは稀なようである。

自然や伝統文化を次世代に残したいかを問う質問では、41人のうち17人が「全くそうだ」、15人が「そうだ」と答えた。生活満足度の高さと明らかな関連性は見つけられなかったが、32人が次世代へ伝達、継承することに価値を見出している。クランから守られている感じがあるかを問う質問に対しては、41人のうち14人は「全くそうだ」、21人が「そうだ」と答えており、35人がクランに守られている感覚を持っていることがうかがえる。「どちらともいえない」と答えた2人は、伝統的タイトルを持つ予定もなく、年収がかなり高めであるという共通項が認められた。

クランにおける権威はどこにあるのか。高齢者の意見は尊重されるべきであることを尋ねた質問に対して、41人のうち20人が「全く同意する」、15人が「同意する」と答え、35人が同意した。また、自分が高齢者になったとき、若い時よりも自分の意見を尊重してもらえるかについて尋ねた質問では、41人のうち12人が「全くそうだ」、17人が「そうだ」と答えており、29人が年を重ねることで自分の意見がより取り入れられるようになると考えている。ただし、4人が「どちらともいえない」、2人が「そうではない」と答えていることも無視できない。親族集団やコミュニティに貢献したいかについては、41人のうち21人が「全くそうだ」、17人が「そうだ」と回答しており、38人と大多数が貢献したいと考えている。若い世代が幸せになれるように支援したいかどうかについては、22人が「全くそうだ」、17人が「そうだ」と回答があり、41人のうち39人が若い世代を支援したいと考えていることがわかる。

## まとめ

パラオにおける行政や教育など近代セクターの現象についても、その土台には母系社会の価値観やメカニズムが広がっている。そのメカニズムには自然・文化を含めたパラオという社会で生活するうえの合理性がある。その合理性を無視するのではなく、むしろよく理解したうえで制度に組み込むことで、現実によく作用する仕組が生まれる筈である。

パラオの人口構造（2005年：第1表）を見ると、高校を卒業する頃から仕事のリタイヤを迎える年齢で、パラオ国内の女性の人口比が男性に比較して著しく小さい。パラオ・コミュニティ・カレッジ(PCC)のアドミッションセンターによれば、5年間で2000人程の若者が外国に留学した。パラオの人口構造と見合わせると、大学・大学院への進学、就職の時期、女性は20～24歳で2.8%、25～29歳で3.2%、30～34歳で3.9%と、同年代の男性（それぞれ3.6%、3.6%、4.7%）と比べて人口が少ないことがわかる。この現象は、パラオの女性は男性に比べて外国で進学や仕事を求めるという言説と重なる。パラオ国立奨学金委員会（Palau National Scholarship Board）によると、留学のための奨学金獲得は2004－2005で、女性125人に対して男性50人、2005－2006で女性139人に対して男性39人、2006－2007で女性121人に対して男性56人、2007－2008で女性130人に対して男性52人、2008－2009で女性105人に対して男性69人と、女性の奨学金獲得数が男性を大きく上回る（表2）。



第1表. パラオ人男女の人口構成比

	男性	女性	
0.9		1.7	75歳～
0.6		0.7	70～74歳
1		1	65～69歳
1.3		1.3	60～64歳
2		1.7	55～59歳
3.1		2.5	50～54歳
4.2		3.5	45～49歳
5.5		4	40～44歳
5.7		4.2	35～39歳
5.4		3.9	30～34歳
4.7		3.2	25～29歳
3.6		2.8	20～24歳
3.6		3.8	15～19歳
4.8		4.8	10～14歳
4		3.6	5～9歳
3.4		3.4	0～5歳

出典 パラオセンサス 2005より 筆者作成

第2表. 男女別奨学金獲得比率

年度	申請者合計 (人)	女性(人)	男性(人)	受給者合計 (人)	女性(人)	男性(人)
2004-2005	234	147	87	175	125	50
2005-2006	275	188	87	178	139	39
2006-2007	294	193	98	177	121	56
2007-2008	279	182	97	182	130	52
2008-2009	247	155	92	174	105	69

出所：パラオ国立奨学金委員会 2008年資料より筆者作成

パラオの女性が男性に比べて高等教育の機会やより収入の高い仕事を求める意欲が高いことは、母系社会の仕組がパラオの女性に対して親族集団への経済的な貢献を強く求める伝統に関係していることが指摘されてきた。そのため、親族集団の女性グループでは親族女性がより良い教育や職業機会を得ることが出来るようお互いに支援し合っているとの指摘もあった(廣瀬 2010, 2013)。この親族集団の女性グループのメンバー間における相互支援のメカニズムを理解することで、パラオの母系社会におけるアイデンティティーに関係する領域の仕組が明らかになる。その仕組みが明らかになることで、パラオの内発性に根差した人材育成にどの様に作用してきたのか、今後どのように展開していくのか、また近代的な教育制度との関係をどのように構築していくのかについて具体的に考えることが出来る。パラオ人個人にとって相互協力がどのようにインセンティブとなって機能しているかについて、幸福研究の知見を借りながらその主観的感情と客観的出来事を創刊させてみていくことはパラオの親族集団における相互協力のメカニズムを知るうえで新しいアプローチとなる。

パラオ人のアイデンティティーである母系制の価値観は、アメリカはもちろん多くの国際社会で用いられている制度とは異なる。パラオが自分自身を見失わずに多様な制度や援助を上手に受け入れるために必要な主体を形づくるうえでパラオ人のアイデンティティーは有効に働いてきた。国際的な水準で設計された教育計画や実施方法は、それがパラオで成功すればするほどに、主体であるパラオ人のアイデンティティーへの想いが薄まってしまわないであろうかとの疑問があった。しかし、今回、人生満足度という指標を軸にしてパラオの様々な現象を見ていったとき、親族集団への帰属が職業や学歴よりも帰属意識がもたらす安心感があることも改めて気づかされた。これは、例えば失業した時に受ける精神的なショック、そしてレジリエンスともいえるべき立ち直る力は私たちの社会よりも大きい。つまり、親族集団のメンバーであるというアイデンティティーが学歴や仕事より大きいという絶対的な安心感がある。そして、お互いに助け合い、収穫物を

分け合い、年齢を重ねても自分の意見を周囲が尊重してくれる。賞味期限の長い幸福感が時間をかけて構築されている。実は負担が大きいというシュウカンも幸福感を高めるための仕組みの一環であるかもしれない。一方、例えば日本の社会はどうであろう。リタイヤした後に、意見を尊重してもらえるか、会社人間が時間をかけて地域や家族との長期的な幸福感をもたらす人間関係を構築してきたか。賞味期限の短い、昇進、昇給、物品やサービスの購入、ゲーム等に興じて人間関係の構築を疎かにしてきてはいないか。パラオの一見大変そうに見える親族組織の価値観は、実は長期的な幸福感をもたらしている優れた仕組みかもしれない。今後の課題として、より多くの対象者からデータを収集し、統計ソフトを利用してパラオの幸福度を構成する要因の分析を進めていきたい。

本稿は、平成 28 年度 挑戦的萌芽研究（研究代表者：廣瀬淳一）「パラオの親族集団に見られる教育・職業機会を求める女性の相互支援の役割と機能の解明」（課題番号 16K13137）（平成 28 年度～30 年度）の一環としてまとめられたものである。

#### 参考文献

- アレキサンダー、ロニー、2003年、『太平洋島嶼国の内発的安全—非核・独立—太平洋運動を例に』、佐藤幸男編『太平洋アイデンティティ』国際書院
- 遠藤央、2002年、「埋葬の政治学」『政治空間としてのパラオ 島嶼近代への社会人類学的アプローチ』世界思想社
- 大石繁宏、2009年、『幸せを科学する—心理学からわかったこと』新曜社
- 大槻久、2014年、『協力と罰の生物学』岩波書店
- 金井良太、2010年、『個性のわかる脳科学』岩波書店
- 金井良太、2013年、『脳に刻まれたモラルの起源—人はなぜ善を求めるのか』岩波書店
- 川勝平太・鶴見和子、2008年、『内発的発展とは何か—詩学（ポエティカ）と科学（サイエンス）の融合』藤原書店
- 小林泉、1994年、『アメリカ極秘文書と信託統治の終焉—ソロモン報告・ミクロネシアの独立—』東信堂
- 須藤健一、1989年、『母系社会の構造—サンゴ礁の島々の民族誌』紀伊国屋書店
- 須藤健一、2002年、「アメリカの軍事構想とパラオ」須藤健一他『パラオ共和国』おりじん書房
- 須藤健一、2012年、「はじめに—オセアニア島嶼国の動き」、須藤健一・柄木田康之『オセアニアと公共圏—フィールドワークからみた重層性』昭和堂
- 鶴見和子、1976年、「国際関係と近代化・発展論」、武者小路公秀・蠟山道雄編、『国際学—理論と展望』東京大学出版会
- 鶴見和子、1989年、「内発的発展論の系譜」、鶴見和子・川田侃 編『内発的発展論』東京大学出版会
- ブルーノ・S・フライ、2012年、『幸福度をはかる経済学』NTT出版
- 廣瀬淳一「パラオにおける女性の自己実現と教育機会—伝統的慣習と親族組織からの期待の中で—」、『日本ジェンダー研究』第13号—日本ジェンダー学会—2010年
- 廣瀬淳一、2013年、「内発的発展における教育の役割を考える—パラオの事例から—」、『第14回国際開発学会春季大会論文集』
- 廣瀬淳一、2014年(a)、「島嶼世界の内発的発展—パラオにおける自然環境と人間社会の関係を中心に—」、高知大学学術研究報告 63号 pp139-153
- 廣瀬淳一、2014年(b)、「ミクロネシアの島嶼世界と教育制度—パラオの歴史（1885年—1994年）から考える内発的発展についての試論—」『高知大学学術研究報告』63号 pp156-170
- 廣瀬淳一、2016年(a)、「小島嶼国家の内発的発展と人材育成—パラオ共和国の教育基本計画を参考に—」、『高知大学学術研究報告』65号, pp139-153
- 廣瀬淳一、2016年(b)、「小島嶼国家の内発的発展と人材育成（2）—パラオにおけるアイデンティティと教育—」、『高知大学学術研究報告』65号, pp155-169.
- ヘレナ・ノーバーク=ホッジ、2017年、『懐かしい未来—ラダックから学ぶ』、懐かしい未来の本
- 前野隆司、2013年、『幸せのメカニズム』講談社現代新書
- 前野隆司、2017年、『実践—ポジティブ心理学—幸せのサイエンス』PHP新書
- Daniel Nettle. (2005). Happiness: The scientific behind your smile. Oxford University Press
- Fehr, E& Gucheter, S. (2002). Altruistic punishment in humans, Nature, 415, 137-140
- Izuma, K., Saito, D. & Sadato, N. (2008). Processing Social and Monetary Rewards in the Human Striatum. Neuron, 58, 284-294
- Kahneman, D.; Krueger, A.; Schkade, D.; Schwarz, N.; Stone, A. (2006). "Would you be happier if you were richer? A focusing illusion". Science 312 (5782): 1908-10.
- Kesolei (1997) Kesolei, 1977. Cultural Conservation: Restrictions to freedom of inquiry: Palauan

strains. Paper presented at the Association of Social Anthropology in Oceania. Workshop on the Role of Anthropology in Contemporary Micronesia Trust Territory of the Pacific Island.

29. Kiblas Yalap Soaladaob, (2010), "Cultivating Identities: Re-thinking Education in Palau". University of Canterbury
30. Office of Planning & Statistics, 2014 Household Income and Expenditure Survey, Ministry of Finance, Palau.
31. Robert H. Frank. (2007). *Falling Behind: How Rising Inequality Harms the Middle Class*. University of California Press
32. Robert H. Frank, (2008) *Income and Happiness: An Imperfect Link*. Economic view. <http://www.robert-h-frank.com/PDFs/EV.03.09.08.pdf>
33. Wedekind, C. & Milinski, M. (2000). Cooperation through image scoring in humans. *Science*, 288, 850-852

---

<sup>1</sup> 1994年9月27日のアメリカ大統領布告(No.6726)を受けて、同年10月1日に自由連合国として独立した。

<sup>2</sup> I(女性, 30代, 学士号) 2016年8月27日にガラロン州マガンラン地区にて聞き取り(母はガラロン州出身、父はベリリユー州出身)

<sup>3</sup> 2014年の政府統計局の調査から計算すると、家計の支出(household expenditure)のうち、シユウカン(ceremony)は10.72%であった。これは平均値ではあるが収入の1割以上がシユウカンに使われている。これに教会などへの寄付を加えると収入の15.1%を寄付に支出していることになる。

<sup>4</sup> コロール州については州法によって子どもが進学・進級の時期にシユウカンを開催することを禁じている。

<sup>5</sup> 「(コミュニティにおいて)誰もが知られ認め合う“誰か”であること」社会の一員であることが、自尊心を育て、その自尊心が人に対する敬意を生み出す。

<sup>6</sup> 客観的幸福は Objective Well-being: OWB で、収入、学歴、生活状況、健康状態の客観的データから判断する。

<sup>7</sup> ヘレナ・ノーバーグ=ホッジ『ラダック 懐かしい未来(Ancient future)』, DVD『幸せの経済学』ユナイテッドピープル

<sup>8</sup> 一般に若者の短期的幸福度は高いが、自己申告する生活満足度は高齢者より低い。

平成29年(2017)10月12日受理

平成29年(2017)12月31日発行